NetBackup™ リリースノート

リリース 11.2.0.1

COHESITY

NetBackup™ リリースノート

最終更新日: 2026-10-06

法的通知と登録商標

Copyright © 2026 Cohesity, Inc All rights reserved.

© 2026 Cohesity, Inc All Rights Reserved.Cohesity、Cohesity ロゴ、その他の Cohesity マークは、Cohesity, Inc の米国における、および/または国際的な商標です。ここで提供される情報は、Cohesity の機密情報および専有情報であり、(a) 意図された受信者により、(b) 有効なライセンスを受けた Cohesity ソフトウェアおよびサービスと共にのみ使用することができます。Cohesity ライセンスの条項については、www.cohesity.com/agreements を参照してください。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Cohesity およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

Cohesity サポート

Cohesity サポートへのお問い合わせ

Cohesity サポートケースを作成するには、いくつかの方法があります。

- Cohesity サポートに移動してベリタスのナレッジベースで検索するか、電話で問い合わせます (米国およびカナダ: 1-855-9CO-HESI (926-4374)、オプション 2)。
- Cohesity サポートポータルにログインして、新しいケースを作成します。
- Cohesity UI の (?) アイコンをクリックし、[サポートポータル (Support Portal)]を選択します。

サポートおよびサービスアシスタンス

最初に、サービスおよびサポートを契約したサービスプロバイダにお問い合わせください。Cohesity と直接連携している場合や、製品の保証や資格、修理の価格設定、またはテクニカルサポートに関連する質問がある場合は、以下のオプションを参照してください。

- 製品の問題に対するソリューションや、提案およびベストプラクティスを見つけるには、Cohesity ナレッジベースを参照してください。
- Cohesity サポートポータルにログインして、新しいケースを作成します。
- オープン中のケースを監視するには、ポータルにログインし、ホームページの[ケース (Cases)]タブをクリックします。このページには、すべてのケースの状態と更新が表示されるはずです。個々のケースの状態を表示することもできます。

パートナーのハードウェアで実行されている Cohesity ソフトウェア

認定されたサードパーティ製ハードウェアで動作する Cohesity ソフトウェアの場合、次のサポートワークフローが適用されます。

1. ハードウェアの問題であると判断できない場合は、まず Cohesity サポートにお問い合わせください。

   メモ: Cohesity はパートナーのハードウェアの交換要求を処理できません。

2. Cohesity サポートは問題の優先順位を判断します。ソフトウェアの問題の場合、Cohesity サポートは引き続きこの問題に取り組みます。
3. ハードウェアまたはファームウェアの問題であるかその可能性がある場合、Cohesity は問題に関する情報をお客様に提供し、適切なパートナーに対するサポートチケットを発行するようお客様に依頼します。
4. Cohesity サポートは必要に応じて、パートナーとお客様との三者通話に参加できます。
5. お客様がパートナーのケースの進捗状況を Cohesity サポートに通知します。

目次

第 1 章 NetBackup 11.2.0.1 について 7

NetBackup 11.2.0.1 のリリースについて 7
NetBackup サードパーティの法的通知について 8

第 2 章 新機能、拡張機能および変更 9

NetBackup の新しい拡張と変更について 9
NetBackup 11.2.0.1 の新機能、変更点、拡張機能 9
Cohesity 用語の変更点 10
NetBackup 11.2 以前のサポートの追加および変更点 11
エントロピーベースのバックアップの異常に関して変更されたファイルを表示 15
OLVM 仮想マシンのバックアップとリカバリのサポート 15
VMware 作業負荷の DirectIO バックアップでのマルウェアスキャンのサポート 15
MSDP-S3 オブジェクトのインポート 15
NetBackup 11.2.0.1 のインストール後またはこのバージョンへのアップグレード後すぐにプライマリサーバー上のクラウド構成ファイルを更新する 15
将来のリリースで廃止される予定のいくつかのシャットダウンコマンド 16

第 3 章 操作上の注意事項 18

NetBackup 11.2.0.1 の操作上の注意事項について 18
NetBackup のインストールとアップグレードの操作上の注意事項 19
Windows で NetBackup 11.2.0.1 のアップグレードが失敗した場合に以前のログフォルダ構造に戻す 19
ネイティブインストールの要件 19
NetBackup サーバーで RFC 1123 と RFC 952 に準拠したホスト名を使用する必要がある 20
HP-UX Itanium vPars SRP のコンテナのサポートについて 20
NetBackup がインストールされるデフォルトパスの変更 21
MongoDB Ops Manager のアップグレード動作 21
NetBackup 管理インターフェースの操作上の注意事項 23

NetBackup バックアップ、アーカイブおよびリストア (BAR) GUI の X フォワーディングで断続的に問題が発生する 23
Web サービスの再起動後にログ収集をキャンセルできない 23
NetBackup Bare Metal Restore の操作上の注意事項 24
PIT リストア後［ホスト ID が存在しません (The host ID does not exist)］というエラーが表示される 24
Linux クライアントでの BMR リストア後に NetBackup サービスが自動的に起動しないことがある 24
Windows 2025 クライアントのリストア時に AWS で NetBackup Bare Metal Restore がハングアップする 25
Windows BMR DDR のリストア後に、ミラー化されたダイナミックボリュームがドライブ文字を受信しないことがある 25
Windows での ReFS ボリュームの BMR リストアエラー (2016 ～ 2025) 26
Bare Metal Restore (BMR) 操作後、Windows の［スタート］メニューと検索が機能しない 28
LVM PV が RAW ディスクに作成された場合、BMR の後にシン論理ボリュームがリストアされない 33
NetBackup クラウドオブジェクトストアの作業負荷の操作上の注意事項 35
NetBackup 11.1 より前のバージョンからアップグレードした後の完全バックアップ 36
バックアップホストとしての RHEL メディアサーバーのサポート対象バージョン 36
NetBackup バージョン 11.2.0.1 の AIR (自動イメージレプリケーション) では NetBackup 10.2 以降が必要 36
バックアップジョブが応答しなくなり、一時的なステージング場所で大量の領域を消費する。 36
NetBackup NAS の操作上の注意事項 37
ファイルパスの親ディレクトリが NDMP 増分イメージに存在しないことがある 37
NetBackup の国際化と日本語化の操作に関する注意事項 38
データベースおよびアプリケーションエージェントでのローカライズ環境のサポート 38
特定の NetBackup ユーザー定義の文字列には非 US ASCII 文字を含めないようにする 38
RHEL 10 の NetBackup BAR GUI で日本語と中国語の文字が正しく表示されない 39
Helios との NetBackup の統合 - 操作上の注意事項 40
Sheltered Harbor 接続エラー 40
MongoDB Ops Manager の増分バックアップが特定のロード条件で不完全になる場合がある 41

付録 A NetBackup ユーザーの SORT について 42
Cohesity Services and Operations Readiness Tools について 42
付録 B NetBackup のインストール要件 44
NetBackup のインストール要件について 44
NetBackup に必要なオペレーティングシステムパッチと更新 45
NetBackup 11.2.0.1 のバイナリサイズ 46
付録 C NetBackup の互換性の要件 49
NetBackup のバージョン間の互換性について 49
NetBackup の互換性リストと情報について 50
NetBackup のライフサイクル終了のお知らせについて 50
付録 D 他のNetBackup マニュアルおよび関連マニュアル 52
NetBackup の関連マニュアルについて 52

1

NetBackup 11.2.0.1 について

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup 11.2.0.1 のリリースについて
- NetBackup サードパーティの法的通知について

NetBackup 11.2.0.1 のリリースについて

『NetBackup リリースノート』のドキュメントは NetBackup のバージョンのリリースに関する情報のスナップショットとして機能します。古い情報およびリリースに適用しない情報はリリースノートから削除されるか、または NetBackup のマニュアルセットの別の所に移行されます。

p.9 の「NetBackup の新しい拡張と変更について」を参照してください。

EEB およびリリース内容について

NetBackup 11.2.0.1 には、以前のバージョンの NetBackup で顧客に影響を与えていた既知の問題の多くに対する修正が組み込まれています。これらの修正の一部は、お客様固有の問題に関連します。このリリースに組み込まれた顧客関連の修正のいくつかは、EEB (Emergency Engineering Binary) として利用可能になりました。

NetBackup 11.2.0.1 で修正された既知の問題を示す EEB および Etrack のリストは、Cohesity Operations Readiness Tools (SORT) Web サイトと、『NetBackup Emergency Engineering Binary ガイド』にあります。

p.42 の「Cohesity Services and Operations Readiness Tools について」を参照してください。

NetBackup アプライアンスのリリースについて

NetBackup アプライアンスは、事前設定バージョンの NetBackup を含むソフトウェアパッケージを実行します。新しいアプライアンスソフトウェアリリースの開発時、NetBackup の最新バージョンがアプライアンスコードの構築基盤として使われます。たとえば、NetBackup Appliance 3.1 は NetBackup 8.1 を基盤としています。この開発モデルにより、NetBackup 内でリリースされたすべての適用可能機能、拡張機能、修正が確実にアプライアンスの最新リリースに含まれます。

NetBackup アプライアンスソフトウェアは、その構築基盤となる NetBackup リリースと同時、またはそのすぐ後にリリースされます。NetBackup アプライアンスを利用する場合、実行する NetBackup アプライアンスバージョンの『NetBackup リリースノート』を確認する必要があります。

アプライアンス固有のマニュアルは次の場所から入手できます。

https://support.cohesity.com/s/article/article-100040113

NetBackup サードパーティの法的通知について

NetBackupには、Cohesityによる所有者の掲示が義務付けられているサードパーティソフトウェアが含まれている場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。NetBackupに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。

これらのサードパーティプログラムの所有権通知とライセンスは、次の Web サイトで入手できる『NetBackup サードパーティの法的通知』文書に記載されています。

https://www.cohesity.com/agreements

2

新機能、拡張機能および変更

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup の新しい拡張と変更について
- NetBackup 11.2.0.1 の新機能、変更点、拡張機能

NetBackup の新しい拡張と変更について

NetBackup リリースには、新機能および製品修正に加えて顧客対応の新しい拡張と変更が含まれることがよくあります。よくある拡張の例には、新しいプラットフォームのサポート、アップグレードされた内部ソフトウェアコンポーネント、インターフェースの変更、拡張された機能のサポートなどがあります。新しい拡張と変更のほとんどは、『NetBackup リリースノート』および NetBackup の互換性リストに文書化されます。

メモ: 『NetBackup リリースノート』には、特定の NetBackup バージョンレベルでそのリリースのタイミングで開始される新しいプラットフォームサポートのみがリストされます。ただし、Cohesity によって、以前のバージョンの NetBackup へのプラットフォームサポートのバックデートが定期的に実行されます。最新のプラットフォームサポートのリストについては、すべてのバージョンの NetBackup 互換性リストを参照してください。

---

p.7 の「NetBackup 11.2.0.1 のリリースについて」を参照してください。

p.50 の「NetBackup の互換性リストと情報について」を参照してください。

NetBackup 11.2.0.1 の新機能、変更点、拡張機能

NetBackup 11.2.0.1 の新機能、変更点、および拡張機能は、以下のカテゴリ別にグループ化されます。トピックに関する詳細情報をお読みになるにはリンクを選択します。

新機能

- 「Cohesity 用語の変更点」
- エントロピーベースのバックアップの異常に関して変更されたファイルを表示「 エントロピーベースのバックアップの異常に関して変更されたファイルを表示」
- 「 OLVM 仮想マシンのバックアップとリカバリのサポート 」
- 「 VMware 作業負荷の DirectIO バックアップでのマルウェアスキャンのサポート 」
- 「 MSDP-S3 オブジェクトのインポート 」

安全な通信の機能、変更点、および拡張機能

メモ: NetBackup 11.2.0.1 をインストールまたは 8.1 より前のリリースからアップグレードする前に、『NetBackup 安全な通信 (最初にお読みください)』を必ずお読みになり、内容をご確認ください。NetBackup 8.1 には、NetBackup コンポーネントの安全な通信を向上させる多くの拡張機能が含まれています。『NetBackup 安全な通信 (最初にお読みください)』というドキュメントでは、次の拡張機能の特徴と利点を説明しています。

NetBackup 安全な通信 (最初にお読みください)

サポートの変更点と拡張機能

- 「NetBackup 11.2 以前のサポートの追加および変更点」
- 「将来のリリースで廃止される予定のいくつかのシャットダウンコマンド」

クラウド関連の変更点と拡張機能

- 「NetBackup 11.2.0.1 のインストール後またはこのバージョンへのアップグレード後すぐにプライマリサーバー上のクラウド構成ファイルを更新する」

Cohesity 用語の変更点

Cohesityでは最新の用語を使用するため、特定の古い用語を最新の用語を置き換え始めています。

メモ: Cohesityでは用語の更新を続けているため、非推奨の用語と新しい用語が同じ意味で使用される場合があります。

非推奨の用語	新しい用語
マスター	プライマリ
スレーブ	セカンダリサーバーまたはメディアサーバー

非推奨の用語	新しい用語
ホワイトリスト	許可リスト
ブラックリスト	ブロックリスト
ホワイトハット	倫理的
ブラックハット	非倫理的

NetBackup 11.2 以前のサポートの追加および変更点

メモ: この情報は変更されることがあります。最新の製品およびサービスのサポートの追加および変更については、すべてのバージョンの NetBackup 互換性リストを参照してください。

次の製品とサービスは NetBackup 11.2 以前のバージョンでサポートされています。

プラットフォーム:

- クライアント - AIX 7.3 TL04 [POWER11]
- クライアント - アルマ Linux 10.2
- クライアント - アルマ Linux 9.8
- クライアント - Oracle Linux 10.2 (RHCK)
- クライアント - Oracle Linux 10.2 (RHCK)
- プライマリサーバー - Oracle Linux 10.2 (UEK/RHCK)
- プライマリサーバー - Oracle Linux 10.2 (UEK/RHCK)
- メディアサーバー - Oracle Linux 10.2 (UEK/RHCK)
- プライマリサーバー - Oracle Linux 9.8 (UEK/RHCK)
- メディアサーバー - Oracle Linux 9.8 (UEK/RHCK)
- プライマリサーバー - Oracle Linux 9.8 (UEK/RHCK)
- メディアサーバー - Oracle Linux 9.8 (UEK/RHCK)
- クライアント - Oracle Linux 9.8 (RHCK)
- クライアント - Oracle Linux 9.8 (RHCK)
- クライアント - Red Hat Enterprise Linux 10.2 [POWER9]
- クライアント - Red Hat Enterprise Linux 9.8 [POWER9]
- プライマリサーバー - Red Hat Enterprise Linux 10.2

- プライマリサーバー - Red Hat Enterprise Linux 10.2
- プライマリサーバー - Red Hat Enterprise Linux 9.8
- Red Hat Enterprise Linux 9.8
- Red Hat Enterprise Linux 10.2
- Red Hat Enterprise Linux Server
- Red Hat Enterprise Linux 10.0 [POWER10]
- Red Hat Enterprise Linux 9.6 [POWER10]
- プライマリサーバー - Rocky Linux 9.8
- プライマリサーバー - Rocky Linux 10.2
- メディアサーバー - Rocky Linux 9.8
- メディアサーバー - Rocky Linux 10.2
- クライアント - アルマ Linux 10.2
- クライアント - アルマ Linux 9.8
- Red Hat Enterprise Linux 9.6 [POWER10]

Bare Metal Restore

- BMR - プライマリ/ブートサーバー/クライアント - OEL 9.7
- BMR - プライマリ/ブートサーバー/クライアント - OEL 9.6

クラスタ化されたプライマリサーバー

- Red Hat Enterprise Linux ペースメーカー (PCS) - 0.11.11 - RHEL 9.8
- Red Hat Enterprise Linux ペースメーカー (PCS) - 0.11.11 - RHEL 9.8

CloudStorage:

- Google ME-CENTRAL2 地域NetBackupフォートクノックス

データベース:

- Informix 15.0.0.1- AIX 7.2 TL5
- MariaDB 12.x - Ubuntu 26.04
- MariaDB 11.x – Debian 13
- MariaDB 12.x - ロッキー Linux 9
- MariaDB 12.x - ロッキー Linux 9
- MariaDB 12.x - Microsoft Windows 2019
- MariaDB 12.x - Microsoft Windows 2019

- MariaDB 11.x - Windows 2025
- Microsoft SQL Server 2019 - Windows Server 2025
- MySQL 9.x - Windows Server 2022
- MySQL 9.x - Windows Server 2022
- MySQL 9.x - Oracle Linux 10.x
- MySQL 8.x – Oracle Linux 9
- MySQL 8.x – Oracle Linux 9
- Oracle Database 26ai – SUSE Linux 15.x
- Oracle Database 26ai – SUSE Linux 15.x
- Oracle Database 26ai – SUSE Linux 15.x
- PostgreSQL 17.x - Ubuntu 22.04
- PostgreSQL 18.x – Ubuntu 22.04
- PostgreSQL 18.x – Windows Server 2025
- PostgreSQL 18.x – Red Hat Enterprise Linux 8.x
- PostgreSQL 18.x – Oracle Linux 9.x
- SAP HANA 2.0 SP08 – Red Hat Enterprise Linux 10.x
- SAP HANA 2.0 SPS 08 - SUSE Linux Enterprise Server 15 SP6 [POWER10]
- SAP HANA 2.0 SPS 08 - Red Hat Enterprise Linux 9.6 [POWER10]
- SAP MaxDB 7.9.11 - Windows Server 2022

ファイバートランスポート:

- クライアント - アルマ Linux 9.8
- クライアント - アルマ Linux 10.2
- Red Hat Enterprise Linux 9.8
- Red Hat Enterprise Linux 10.2
- クライアント - AIX 7.3 TL04 [POWER11]
- Red Hat Enterprise Linux 9.6 [POWER10]

NetBackup Snapshot Manager

- Rocky Linux 9.8
- Red Hat Enterprise Linux 9.8
- Rocky Linux 9.7

- SUSE Linux Enterprise 15
- Oracle Enterprise Linux 9.5
- Red Hat Enterprise Linux 9.8
- Oracle Enterprise Linux 9.6
- Oracle Enterprise Linux 9.7
- Red Hat Enterprise Linux 10.1

NDMP:

- NetApp ONTAP 9.18.x NDMP

OpenStorage:

- 9livesdata High9Stor Openstorage プラグイン
- Dell EMC Data Domain DDVE 8.4 OpenStorage プラグイン 8.4
- HPE StoreRent Gen5 (5720 および 7700) OpenStorage プラグイン 4.4

CloudStorage:

- FortKnox for NetBackup – Azure リージョンチリ中部
- FortKnox for NetBackup – AWS リージョンアジア太平洋 (マレーシア)
- FortKnox for NetBackup – AWS リージョンイスラエル (テルアビブ)

テープドライブ:

- IBM LTO-9 テープドライブ

テープライブラリ:

- LTO9 エミュレーションを使用する HPE Store Lce Gen5 (5720 および 7700) VTL
- LTO9 エミュレーションを使用する HPE Store Lce Gen5 (5720 および 7700) VTL

VirtualTape:

- LTO9 エミュレーションを使用する HPE Store Lce Gen5 (5720 および 7700) VTL
- LTO9 エミュレーションを使用する HPE Store Lce Gen5 (5720 および 7700) VTL
- LTO9 エミュレーションを使用する HPE Store Lce Gen5 (5720 および 7700) VTL
- LTO9 エミュレーションを使用する HPE Store Lce Gen5 (5720 および 7700) VTL
- LTO9 エミュレーションを使用する HPE Store Lce Gen5 (5720 および 7700) VTL

VMware

- vSphere 9.1

エントロピーベースのバックアップの異常に関して変更されたファイルを表示

[変更されたファイルの表示 (View modified files)]オプションを使用して、エントロピーベースのバックアップの異常を調査できるようになりました。このオプションは、選択した時間帯に異常バックアップの前後に変更されたファイルを一覧表示します。これにより、疑わしいファイルの変更をすばやく検出し、結果を CSV としてダウンロードして、SIEM または SOAR ツールで分析できます。

詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「エントロピーベースのバックアップ異常の変更済みファイルの表示」セクションを参照してください。

OLVM 仮想マシンのバックアップとリカバリのサポート

KVM のNetBackupで、Oracle Linux Virtualization Manager(OLVM)仮想マシンのバックアップとリカバリがサポートされるようになりました。OLVM エンジンを NetBackup Web UI に直接登録し、標準 KVM ポリシーを使って OLVM VM を保護できます。

詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

VMware 作業負荷の DirectIO バックアップでのマルウェアスキャンのサポート

VMware 作業負荷の DirectIO バックアップでのマルウェアスキャンのサポート

マルウェアのスキャンについて詳しくは、『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』の「マルウェアの検出」の章を参照してください。

MSDP-S3 オブジェクトのインポート

MSDP-S3 オブジェクトのインポートでは、既存の AIR/ストレージライフサイクルポリシーレプリケーションを使用して、稼働環境の MSDP S3 バケットとそのディザスタリカバリレプリカバケットが同期されます。1 つのバケットに書き込まれたオブジェクトはレプリカ MSDP サーバーの一致するバケットに自動的にインポートされるため、フェールオーバークライアントはリストアを実行せずに同じデータを参照します。

詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。

NetBackup 11.2.0.1 のインストール後またはこのバージョンへのアップグレード後すぐにプライマリサーバー上のクラウド構成ファイルを更新する

NetBackup 環境でクラウドストレージを使用する場合には、NetBackup 11.2.0.1 をインストールするか、そのバージョンにアップグレードした直後に、NetBackup プライマリサーバー上のクラウド構成ファイルを更新する必要がある場合があります。NetBackup 11.2.0.1

へのアップグレード後にクラウドプロバイダまたは関連の拡張機能がクラウド構成ファイルから利用できない場合、関連する操作は失敗します。

Cohesity は次回のリリースを待たずに、クラウド構成ファイルに新しいクラウドサポートを継続的に追加します。クラウド構成ファイルの更新は、クラウド構成パッケージのバージョン 2.13.6 以降にクラウドストレージプロバイダが追加された場合にのみ必要です。

バージョン 2.14.1 以降には次のクラウドサポートが追加されていますが、NetBackup 11.2.0.1 の最終ビルドには含まれていませんでした。

- HPE Alletra Storage MP X10000 - Object Lock (S3)
- COSP (クラウドオブジェクトストア保護) - HPE Alletra Storage MP X10000
- Secsmart HyperProtect Data Lake Storage (S3)
- COSP (クラウドオブジェクトストア保護) Nutanix Objects
- COSP (クラウドオブジェクトストア保護) - PSPACE InfiniStor
- Samsung Cloud Platform (S3)
- クラウドオブジェクトストア保護 (COSP) - Samsung Cloud Platform
- FortKnox for NetBackup AWS (S3) リージョン
  - アジア太平洋 (台北)
  - アジア太平洋 (マレーシア)
  - アジア太平洋 (ニュージーランド)
  - アジア太平洋 (タイ)
- Amazon (S3) リージョン:
  - アジア太平洋 (ニュージーランド)

最新のクラウド構成パッケージについては、次の記事を参照してください。

https://support.cohesity.com/s/update-detail?c__updateId=UPD971796

クラウドストレージ構成ファイルの追加方法については、次の技術情報を参照してください。

https://support.cohesity.com/s/article/article-100039095

将来のリリースで廃止される予定のいくつかのシャットダウンコマンド

NetBackup プロセスとデーモンのシャットダウン用の新しい、詳細に文書化されたコマンドが今後のリリースで提供される予定です。その時点で、次のコマンドは利用できなくなります。

- `bp.kill_all`

- bpdown
- bpclusterkill

この変更に応じた計画を立ててください。新しいコマンドは、今後のリリースノートおよび『NetBackup コマンドリファレンスガイド』で発表されます。

3

操作上の注意事項

この章では以下の項目について説明しています。

- NetBackup 11.2.0.1 の操作上の注意事項について
- NetBackup のインストールとアップグレードの操作上の注意事項
- NetBackup 管理インターフェースの操作上の注意事項
- NetBackup Bare Metal Restore の操作上の注意事項
- NetBackup クラウドオブジェクトストアの作業負荷の操作上の注意事項
- NetBackup NAS の操作上の注意事項
- NetBackup の国際化と日本語化の操作に関する注意事項
- Helios との NetBackup の統合 - 操作上の注意事項
- Sheltered Harbor 接続エラー
- MongoDB Ops Manager の増分バックアップが特定のロード条件で不完全になる場合がある

NetBackup 11.2.0.1 の操作上の注意事項について

NetBackup の操作上の注意事項は、NetBackup のマニュアルセットまたは Cohesity のサポート Web サイトのどこにも文書化されない可能性のある NetBackup のさまざまな操作に関する重要な点について説明したものです。操作上の注意事項は、NetBackup の各バージョンに対応する形で『NetBackup リリースノート』に記載されます。通常、操作上の注意事項には、既知の問題、互換性の問題、およびインストールとアップグレードに関する追加情報が含まれます。

操作上の注意事項は、NetBackup のバージョンがリリースされた後に追加または更新されることがよくあります。この結果、オンラインバージョンの『NetBackup リリースノート』またはその他の NetBackup マニュアルは、リリース後の更新となる場合があります。の指

定のリリースに関する最新版のマニュアルセットには、ベリタスのサポート Web サイトの次の場所でアクセスできます。NetBackupCohesity

NetBackup のリリースノート、管理者ガイド、インストールガイド、トラブルシューティングガイド、スタートガイド、ソリューションガイド

NetBackup のインストールとアップグレードの操作上の注意事項

NetBackup は、さまざまな方法を使って異機種混合環境でインストールしたり、アップグレードしたりすることができます。NetBackup は、同一環境で混在しているさまざまなリリースレベルの NetBackup サーバーとクライアントとも互換性があります。このトピックでは、NetBackup 11.2.0.1 のインストール、アップグレード、ソフトウェアパッケージに関連する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

Windows で NetBackup 11.2.0.1 のアップグレードが失敗した場合に以前のログフォルダ構造に戻す

root 以外または管理者以外で起動したプロセスのログについて、レガシーログフォルダ構造が変更されました。新しいフォルダ構造は、プロセスログディレクトリ名の下に作成されます。詳しくは、『NetBackup ログリファレンスガイド』のレガシーログのファイル名形式に関するセクションを参照してください。

Windows の場合、NetBackup 11.2.0.1 へのアップグレードが失敗してロールバックが発生した場合は、次のコマンドを実行して、以前のバージョンの NetBackup での作業を続行します。

```
mklogdir.bat -fixFolderPerm
```

詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』で `mklogdir` コマンドの説明を参照してください。

ネイティブインストールの要件

NetBackup 8.2 で初期インストールが変更され、現在は応答ファイルが必要です。この変更は、ネイティブパッケージを使用して VM テンプレートを作成する、または製品を構成せずに NetBackup パッケージをインストールする必要があるユーザーに悪影響を及ぼす場合があります。Linux では、以前の動作を実現する方法の 1 つとして、RPM パッケージマネージャの `-noscripts` オプションを使用できます。`VRTSnbpck` パッケージのインストール時にこのオプションを指定すると、構成の手順を回避できます。このオプションは、その他のパッケージをインストールする場合に指定する必要はありません。この場合でも応答ファイルは存在する必要がありますが、指定する必要がある値は、マシンのロール (クライアントまたはメディアサーバーのいずれか) のみです。次に例を示します。

```
echo "MACHINE_ROLE=CLIENT" > /tmp/NBInstallAnswer.conf
rpm -U --noscripts VRTSnbpck.rpm
rpm -U VRTSpbx.rpm VRTSnbclt.rpm VRTSpddea.rpm
```

NetBackup サーバーで RFC 1123 と RFC 952 に準拠したホスト名を使用する必要がある

NetBackup 8.0 以降では、すべての NetBackup サーバー名に RFC 1123 (「Requirements for Internet Hosts - Application and Support」) と RFC 952 (「DOD Internet Host Table Specification」) の規格に準拠するホスト名を使用する必要があります。これらの規格には、ホスト名に使用できる文字と使用できない文字が規定されています。たとえば、ホスト名にアンダースコア文字 (_) は使用できません。

これらの規格とこの問題に関して詳しくは、次の資料を参照してください。

RFC 952

RFC 1123

https://support.cohesity.com/s/article/article-100033400

これらの規格は、すべての NetBackup ホストを含む、すべての計算ホストに適用する必要があります。レガシーの環境と機能に対応するため、2010 年より前に実装された NetBackup 機能では、一部の準拠しない文字が引き続き許可されます。ただし、これより新しい機能や最近統合されたサードパーティコンポーネントは、業界規格に準拠しないホスト名についてテストされておらず、このようなホスト名との互換性はない可能性があります。

状況によっては、規格に準拠するネットワークホスト名のエイリアスでネームサービスを構成し、NetBackup を構成するときにエイリアスを使用できる場合があります。ただし、すべての機能との互換性が確実なのは、規格に準拠するホスト名を使用した場合です。

HP-UX Itanium vPars SRP のコンテナのサポートについて

Hewlett-Packard Enterprise (HPE) は、HP-UX Virtual Partitions (vPars) 対応サーバーに Secure Resource Partitions (SRP) という新しいタイプのコンテナを導入しました。SRP で導入されたセキュリティ変更の一部として、`swinstall` や `swremove` などのネイティブ HP-UX インストールツールの SRP 環境内での実行は無効です。`swinstall` と `swremove` ツールは vPars を実行しているグローバルホストからのみ呼び出すことが可能で、SRP コンテナにネイティブパッケージをプッシュインストールします。

NetBackup はグローバルビューへのインストールのみをサポートします。HPE Itanium SRP コンテナ (プライベートファイルシステム、共有ファイルシステムまたは作業負荷) へのインストールを試行すると、NetBackup のインストールが失敗します。

NetBackup がインストールされるデフォルトパスの変更

NetBackup 11.1 以降、NetBackup がインストールされるデフォルトパスは次のとおりです。

```
C:¥Program Files¥Cohesity NetBackup¥NetBackup
```

NetBackup 11.0.0.1 以前のバージョンのデフォルトインストールパスは次のとおりです。

```
C:¥Program Files¥Veritas
```

クラスタでは、すべてのクラスタノードのインストールパスが同じであることを確認する必要があります。NetBackup 11.0.0.1 以前から NetBackup 11.1 にアップグレードする場合は、古いクラスタノードのデフォルトインストールパスを確認し、追加する新しいノードに同じパスを使用する必要があります。

たとえば、古いクラスタノードにデフォルトインストールパスがある場合は、アップグレード後に新しいノードのインストールパスとして `C:¥Program Files¥Veritas` を使用する必要があります。

MongoDB Ops Manager のアップグレード動作

NetBackup 11.2 以降にアップグレードした後:

- アップグレード前に作成された既存の MongoDB Ops Manager ポリシーとバックアップイメージは、引き続き利用でき、変更されません。
- 既存の MongoDB Ops Manager ポリシーに差分増分バックアップ形式が含まれている場合、そのバックアップ形式はアップグレード後に増分バックアップとして実行されます。
- oplog バックアップ (NetBackup 11.2 以上でトランザクションログ (TLOG) バックアップと呼ばれる) の実行を続行するには、既存の MongoDB Ops Manager ポリシーを手動で更新し、差分増分バックアップ形式をトランザクションログ (TLOG) に変更する必要があります。
- アップグレード前に作成された Oplog バックアップイメージは、リストアビューに差分増分バックアップイメージとして引き続き表示されます。
- NetBackup 11.2 以降を使用して作成された Oplog (トランザクションログ/TLOG) バックアップイメージは、リストアビューにトランザクションログのバックアップイメージとして表示されます。

MongoDB Ops Manager トランザクションログ (TLOG) のバックアップの継続性に関する注意事項

MongoDB Ops Manager のトランザクションログ (oplog) のバックアップは、継続的な oplog メタデータを使用して、指定した時点へのリカバリをサポートします。NetBackup

は、バックアップおよびリストア操作中に oplog の継続性を検証して、リカバリの一貫性を確保します。

oplog または増分バックアップが失敗した場合、指定した時点へのリカバリに必要な oplog チェーンの継続性が損なわれる可能性があります。

MongoDB Ops Manager のログは、次のようなメッセージを報告することがあります。

- oplog ファイルの非連続セットが発生しました (Observed non-continuous sets of oplog files)
- この oplog ファイルセットでギャップの重複が発生しました (Gap overlap observed for this set of oplog files)

影響

- oplog または増分バックアップが失敗した後に、後続の oplog または増分バックアップ (再試行操作や自動再試行操作を含む) が成功したことを報告することがあります。ただし、それより前に oplog の継続性に問題が生じた場合、正常に完了しても、指定した時点でのリカバリが可能であるということにはなりません。
- したがって、新しい完全バックアップが実行されるまで、影響を受けるバックアップチェーンは、ログベースの (指定した時点への) リカバリには使用できません。
- スナップショットベースのリストア (ログなしの完全または増分) は引き続き利用できます。

操作上のガイダンス

oplog または増分バックアップの失敗が発生した場合、以下のように対処してください。

1. 現在の完全バックと oplog バックアップのチェーンを、指定した時点でのリカバリに利用できないものとして扱います。
2. 新しい完全バックアップを実行して、新しいリカバリの基準を確立します。
3. MongoDB Ops Manager のログに、oplog の継続性または保持に関する警告がないか確認します。
4. oplog の保持サイズを検証し、バックアップスケジュールが、所要のリカバリ期間に適合していることを確認します。

警告: NetBackup は oplog の継続性を検証しますが、MongoDB oplog メタデータの生成、修復、調整は行いません。ログベースのリカバリを正常に実行するには、MongoDB Ops Manager による継続的な oplog の保持と正確なメタデータレポートが必要です。

NetBackup 管理インターフェースの操作上の注意事項

NetBackup 管理者には、NetBackup の管理に使用できる複数のインターフェースの選択肢があります。すべてのインターフェースには同様の機能があります。このトピックでは、NetBackup 11.2.0.1 のこれらのインターフェースに関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

個々の NetBackup 管理インターフェースについて詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』または『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

インターフェースをインストールする方法については、『NetBackup インストールガイド』を参照してください。管理コンソールとプラットフォームの互換性については、Cohesity のサポート Web サイトにある各種の NetBackup 互換性リストを参照してください。

p.50 の「NetBackup の互換性リストと情報について」を参照してください。

NetBackup バックアップ、アーカイブおよびリストア (BAR) GUI の X フォワーディングで断続的に問題が発生する

NetBackup バックアップ、アーカイブおよびリストア (BAR) GUI の X フォワーディングで断続的に問題が発生することがあります。この動作は、X フォワーディングを使用するときにのみ発生します。この問題は、ローカルコンソールでは発生しません。問題の多くは Linux サーバーにおいて発生しますが、それに限定されるものではありません。この問題は、一般的には Xming や XBrowser などの古いバージョンの X ビューアが使用されたときに発生します。

MobaXterm を使用すると、問題の発生を最小限に抑える、または問題を解消できるとも考えられます。X フォワーディングで問題が発生した場合には、X ビューアをアップグレードして同じ操作を試みるか、またはローカルコンソールからサーバーにアクセスしてください。

Web サービスの再起動後にログ収集をキャンセルできない

ログ収集の進行中に NetBackup Web サービスが再起動された場合、NetBackup Web UI からログ収集をキャンセルすることはできません。

これは、すでに実行されていたログ収集要求が Web サービスの再起動後に保持されないために発生します。その結果、Web UI の[キャンセル (Cancel)]オプションに[エンティティが見つかりません (No Entity Found)]というエラーメッセージが表示されます。

回避方法: NetBackup コマンドラインを使用して、ログ収集をキャンセルできます。

```
./nblogadm --action cancelcollection --recid {collectionId} --api
```

NetBackup Bare Metal Restore の操作上の注意事項

NetBackup Bare Metal Restore (BMR) では、サーバーのリカバリ処理が自動化され簡素化されるため、オペレーティングシステムの再インストールまたはハードウェアの構成を手動で実行する必要がなくなります。このトピックでは、NetBackup 11.2.0.1 の BMR に関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

PIT リストア後[ホスト ID が存在しません (The host ID does not exist)]というエラーが表示される

指定した時点 (PIT) のリストア操作 (完全ファイルシステムリストアまたは BMR リストアのいずれかが含まれる場合がある) が実行された後、エラーメッセージ[ホスト ID が存在しません (The host ID does not exist)]が表示されます。

このシナリオでは、root または管理者アカウントとして SERVICE_USER が構成されている場合に完全バックアップが実行されます。このアカウントは、root または管理者の所有権を持つ NetBackup のインストール済みバイナリのバックアップを取得します。

リストアの前に、root または管理者以外のアカウントで SERVICE_USER が構成され、サービスユーザーが `bp.conf` の一部としてバックアップされる増分バックアップが取得されます。増分バックアップによる PIT リストア操作では、SERVICE_USER エントリがリストアされます。ただし、バイナリは root アカウントの所有権でリストアされます。

回避方法

サービスユーザーを変更した後、ファイルシステムの MS-Windows¥Standard Policy か BMR ポリシー構成かにかかわらず、完全バックアップを作成する必要があります。

Linux クライアントでの BMR リストア後に NetBackup サービスが自動的に起動しないことがある

Linux クライアントで BMR (Bare Metal Restore) のリストア操作を実行した後、NetBackup サービスが自動的に起動しないことがあります。

BMR リストア操作後に NetBackup サービスがしばらく実行され、BMR のリストア後のスクリプトが正常に完了する場合があります。しかし、その後で NetBackup サービスが停止することがあります。

この問題は、サービスユーザーが、NetBackup Linux クライアントで定義されている root ユーザーと異なる場合にのみ発生します。

回避方法

Linux クライアントで NetBackup サービスを手動で起動します。

サービスを起動するには、次のコマンドを実行します。

```
/usr/openv/netbackup/bin/bp.start_all
```

Windows 2025 クライアントのリストア時に AWS で NetBackup Bare Metal Restore がハングアップする

AWS では、Windows 2025 はデフォルトで NVMe ディスクを使用します。Bare Metal Restore は NVMe ディスクをサポートしていません。

回避方法:

この問題の回避方法はありません。

Windows BMR DDR のリストア後に、ミラー化されたダイナミックボリュームがドライブ文字を受信しないことがある

Dissimilar Disk Restore (DDR) を使用する Windows Bare Metal Restore (BMR) 環境では、ミラー化された (RAID-1) ダイナミックボリュームがリストア後にドライブ文字を自動的に受信しない場合があります。この動作は、ディスクの再構築およびシステムの起動時に Windows ディスク管理と DDR がダイナミックディスクを処理する方法が原因だと予想されます。

原因

BMR DDR のリストアの間、ディスクとボリュームの再構築はドライブ文字の割り当てよりも優先されます。BMR プロセスでは、ディスクレイアウト、パーティション構造、ダイナミックディスクのメタデータのリストアに重点が置かれています。非システムボリュームのドライブ文字は、この段階では再割り当ては保証されていません。

リストア後に、ミラー化されたダイナミックボリュームは次の状態で表示される可能性があります。

- 再同期中 (Resynching)
- 縮退 (Degraded)
- 正常 (Healthy) (ドライブ文字が割り当てられていない)

Windows では、ドライブ文字の割り当てはダイナミックミラーが完全に認識されて安定化されるまで遅れる場合があります。さらに、ブート中に元のドライブ文字がすでに予約されている、一時的に割り当てられている、または別のボリュームと競合している場合、Windows では衝突を避けるために文字の割り当てを保留することがあります。

ハードウェアの相違、ディスク順序の変更、その他マッピングの差異が関係する DDR シナリオでは、システムボリューム (C:) のみが自動マッピングを保証されています。他のボリュームは、正常にリストアされてもマウントが解除されたままの場合があります。[ディスクの管理]では通常、ミラー化されたボリュームは次のように表示されます。

- 正常
- ダイナミック
- ドライブ文字なし

ボリュームにはアクセスできますがマウントされていません。また、ドライブ文字を手動で割り当てるまではアプリケーションが失敗する場合があります。

回避方法

システムブート後、以下のように Windows ディスク管理を使用してドライブ文字を手動で割り当てます。

1. ［ディスクの管理］を開きます。
2. ミラー化されたボリュームを右クリックします。
3. ［ドライブ文字のパスの変更］を選択します。
4. 目的のドライブ文字を割り当てます。

文字が割り当てられると、ボリュームは完全に機能するようになります。再構築、再フォーマット、追加のリストア操作は不要です。

Windows での ReFS ボリュームの BMR リストアエラー (2016 ～ 2025)

原因

Windows Server 2016、2019、2022、2025 の Bare Metal Restore (BMR) 中、ReFS ボリュームのリストアに失敗し、「フォーマットされていない」状態で表示されます。

これは、ReFS バージョン間の非互換性が原因で、ReFS ボリュームのベアメタルリストアまたはブロックレベルリストアをサポートする ADK/WinPE のバージョンがないために発生します。

インストールされているオペレーティングシステムで使用されている ReFS バージョン

表 3-1

Windows バージョン	ReFS バージョン
Windows Server 2016	3.1
Windows Server 2019	3.4
Windows Server 2022	3.7
Windows Server 2025	3.14

SRT/WinPE 環境の ReFS バージョン

表 3-2

環境	ReFS バージョン
SRT/ADK WinPE	3.9

重要な互換性に関する注意事項

WinPE ReFS ドライバ (3.9) は、ダウングレードしたり、OS 固有の ReFS バージョン (3.1、3.4、3.7、3.14) と下位互換にすることはできません。

Microsoft 社はこのダウングレード制限に対する回避方法を提供していません。

その結果、次の問題が発生します。

- リストアされた ReFS ボリュームがフォーマットされていない状態で表示される
- 対象の OS が WinPE で作成された ReFS 3.9 メタデータを読み取ることができない
- BMR リストア後にボリュームが使用不能になる

原因

ReFS バージョンは、メタデータレベルでは下位互換性がありません。

重要なルール:

- 下位の ReFS ドライバは、上位バージョンからメタデータを再作成または再生できません
- WinPE の ReFS ドライバは読み取り専用で、再構築用には設計されていません
- BMR リストアには、メタデータの再生、割り当てマップ、および整合性ストリーム処理 (バージョンの不一致で失敗する操作) が必要です

互換性マトリックス

以下のすべての組み合わせは、バージョンの不一致が原因で失敗します。

表 3-3

ソースボリューム (ReFS)	対象の OS	WinPE ReFS (3.9)	結果
3.14 (Windows 2025)	Server 2025	3.9	失敗
3.7 (Winodws 2022)	Server 2022	3.9	失敗
3.4 (Winodws 2019)	Server 2019	3.9	失敗
3.4 (Windows 2016)	Server 2016	3.9	失敗

失敗の原因は次のとおりです。

- WinPE で必要な ReFS メタデータ構造を作成できない
- バージョンの不一致によりメタデータ再生が妨げられる
- リストアツールがサポート外の API にフォールバックされる

解決方法

直接の解決方法はありません。

Microsoft 社は、BMR ワークフロー中に ReFS のバージョンをアップグレードまたはダウングレードする方法を提供していません。

回避方法

元のオペレーティングシステムと一致する正しい 3.x バージョンで ReFS ボリュームを確実にリストアするには、次の手順を実行します。

1. BMR 構成を右クリックし、新しいクライアントの構成を使用してコピーを作成します。
2. コピーした構成を編集し、ボリュームマッピングからすべての ReFS ボリュームを除外します。
3. [リストア準備 (Prepare to Restore)]を実行し、システムのリストアに進みます。
4. リストアされたオペレーティングシステムでマシンをブートした後、次の手順を実行します。
   - 手順 2 で除外した ReFS ボリュームを作成します
   - ディスクの管理または DISKPART を使用してフォーマットします
   - Windows は、その OS の適切なバージョンを使用して ReFS ボリュームを自動的に作成します
5. 次を使用して ReFS バージョンを確認します: `fsutil fsinfo refsinfo <DriveLetter:>`
6. NetBackup Web UI の[リカバリ (Recovery)]タブからこれらのボリュームのデータをリストアします。

Bare Metal Restore (BMR) 操作後、Windows の[スタート]メニューと検索が機能しない

問題

Bare Metal Restore (BMR) 操作後、Windows の[スタート]メニューと検索が機能しません。

この動作は、Windows Server 2019 (2K19) EFI クライアントで発生しています。

原因

最も考えられる原因は、リカバリ処理中に AppX 状態リポジトリデータベースが適切に更新されなかったことです。

アプリケーションファイルが正常にリストアされた一方、システムの内部登録データベースが同期されなかったため、組み込みの Windows コンポーネントの初期化中にエラーが発生しました。

解決方法

Appx Package の登録に関する Microsoft 社のマニュアルと推奨事項に従います。

公式のマニュアルとは別に、登録に関連する不整合の解決に次の手順が役立つ場合があります。

リカバリ手順

1. 管理者として PowerShell を開きます。
2. 次のコマンドを実行します。

```
Get-AppXPackage -AllUsers | Foreach {
  Add-AppxPackage -DisableDevelopmentMode -Register
"$($_.InstallLocation)¥AppXManifest.xml"
}
```

このコマンドは、それぞれの `AppXManifest.xml` ファイルを読み込み、関連する登録データを再構築することで、インストールされているすべての AppX パッケージを再登録します

機能への影響

このコマンドを実行すると、次の操作が実行されます。

- ユーザープロファイル全体にインストールされているすべての AppX パッケージを列挙する
- 各 `AppXManifest.xml` を解析する
- パッケージのアクティブ化と ID マッピングを再構築する
- Windows State Repository のパッケージを再インデックス付けする
- 必要なセキュリティ識別子 (ALL APPLICATION PACKAGESを含む) を再適用する
- AppX 配備メタデータを再構築する

このプロセスは、AppX パッケージの登録の不一致と、関連するシェルの初期化の問題を解決するのに役立ちます。

登録後の操作

再登録が完了したら、次の手順を実行します。

- explorer.exe プロセスを再起動して Windows シェルを再起動し、更新済みの登録が適用されるようにします。

前提条件と検証チェック

AppX パッケージの再登録を実行する前に、次のことを確認します。

AppLocker の構成

- AppLocker 拒否ルールがパッケージ化されたアプリケーションをブロックしていないことを確認します。
- secpol.msc を開き、Application Control Policies → AppLocker に移動します。
- パッケージ化されたアプリの実行を拒否するルールがないことを確認します。

必要なディレクトリ

次のディレクトリが存在することを確認します。

- C:¥Windows¥System32¥AppLocker
- C:¥Windows¥AUInstallAgent

見つからない場合は作成します。

これらのディレクトリがすでに存在する場合は削除しないでください。

AppReadiness ディレクトリ

- C:¥Windows¥AppReadiness が存在することを確認します。
- 見つからない場合は、ディレクトリを作成します。

この場所は、AppX ステージング操作に必要です。

レジストリの検証

- HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Appx に移動します。
- PackageRoot レジストリ値が C:¥Program Files¥WindowsApps を指していることを確認します。

オプションのサービスの再起動

必要に応じて、パッケージの再登録の前または後に AppX 配備サービスを再起動します。

```
Restart-Service AppXSVC -Force
```

公式のエラーコンテキスト

- 0x80073CF9 (インストールに失敗しました):「ステージング操作を完了できなかったためパッケージ配備に失敗しました」と公式に定義されています。
  BMR シナリオの場合:
  これは通常、次のことを示します。
  ステージング操作は、Windows が状態リポジトリにコミットする前にアプリケーションを準備するプロセスです。
  - AppReadiness ディレクトリが見つかりません
  - AUInstallAgent ステージングディレクトリが見つかりません
  - ディレクトリ権限が正しくない
- 0x80070003 (パスが見つかりません):「配備ターゲットアクセスのエラー」と公式に言及されています。
  BMR シナリオの場合:
  これにより、ストリップされた SID または不適切な SID が原因で、見つからないかアクセス不能の可能性があることが確認されます。
  これは、データベースに登録参照が含まれているが、物理ディレクトリ構造が見つからないかアクセス不能であることを示します。
  - AppX データベースが必要なディレクトリ構造を見つけることができません
  - `C:¥Windows¥SystemApps` または
  - `C:¥Program Files¥WindowsApps`

Windows Bare Metal Restore の後に、ごみ箱の破損に関する警告が発生する

問題

Windows クライアントで Bare Metal Restore (BMR) を実行すると、ログイン後またはデスクトップにアクセスしたときに、次の警告メッセージが表示されることがあります。

エラーメッセージ

```
The Recycle Bin on C:¥ is corrupted. Do you want to empty the Recycle Bin for this drive?
```

- [はい (Yes)]が選択されるまで、プロンプトが表示され続けます。
- この警告は、C:ドライブだけでなく、リストアされたシステムに存在する各ドライブに対して表示される場合があります。
- 非表示のシステムフォルダ `$Recycle.Bin` と `System Volume Information` がすべてのドライブで表示される場合があります。

- このメッセージは、ごみ箱にユーザーデータが含まれていない場合でも表示される場合があります。

原因

この問題は、Bare Metal Restore プロセス中に、$RECYCLE.BIN フォルダが完全に同期されていないか、正しく再初期化されないことが原因で発生します。

この動作は表面的なものであり、オペレーティングシステムまたは復元されたユーザーデータの破損を示すものではありません。

解決方法

この問題は、影響を受けるボリュームのごみ箱フォルダを再作成することで解決できます。

問題を解決するための手順:

1. リストアされたシステムにログインします。
2. 管理者権限でコマンドプロンプトを開きます。
3. 影響を受ける各ドライブに対して次のコマンドを実行します。

```
RD C:¥$Recycle.bin /s /q
```

メモ: 他のボリュームも影響を受ける場合は、C: を適切なドライブ文字に置き換えてください。

4. システムを再起動します。

追加情報

- リストアされた各 NTFS ボリュームのルートに対するフルコントロール権限がシステムアカウントにあることを確認します。
- この問題は、ごみ箱以外のシステム機能やデータ整合性には影響を与えません。
- プロンプトを受け入れて削除されるデータは、ごみ箱の内容のみに限られます。

データのリカバリ

バックアップ時にごみ箱に存在したデータは、リダイレクトリストアを使用してリカバリできます。

1. NetBackup コンソールの[リカバリ (Recovery)]タブに移動します。
2. 影響を受ける Windows クライアントを選択します。
3. 次のパスを参照します。

```
C:¥$RECYCLE.BIN
```

4 「$RECYCLE.BIN」フォルダを選択します。

5 5. [すべてを元の場所にリストア (Restore everything to original location)]を選択し、リストアを開始します。データはごみ箱の中にリストアされます。

追加情報

- リストアされた各 NTFS ボリュームのルートに対するフルコントロール権限がシステムアカウントにあることを確認します。
- この問題は、ごみ箱以外のシステム機能やデータ整合性には影響を与えません。
- プロンプトを受け入れて削除されるデータは、ごみ箱の内容のみに限られます。

LVM PV が RAW ディスクに作成された場合、BMR の後にシン論理ボリュームがリストアされない

問題

LVM シンプロビジョニングを使用して Linux クライアントの NetBackup Bare Metal Restore (BMR) が正常に完了した後、システムブート後にシン論理ボリューム (シン LV) が消失したり、使用できなくなったりします。

BMR リストアジョブは致命的エラーなしで完了しますが、シンプロビジョニングされた論理ボリュームに格納されているデータは、リストアまたはマウントされません。

この動作は、LVM 物理ボリューム (PV) がパーティションベースのデバイス (/dev/sdb1 など) ではなく RAW ディスク (/dev/sdb など) に直接作成された場合に発生します。

環境

- 製品: Veritas NetBackup Bare Metal Restore (BMR)
- クライアント OS: Linux (RHEL 9.x など)
- ストレージの構成
  - LVM シンプロビジョニング
  - RAW ディスク上に作成された物理ボリューム (ディスクパーティションなし)
- リストア形式: Bare Metal Restore (BMR)

現象

BMR リストアが完了し、システムが再ブートした後:

- シンプールは存在する場合がありますが、次のようになります。
  - シン論理ボリュームが存在しない、または
  - ファイルシステムが存在しない、または

- ボリュームがマウントされていない、または
- マウントされたボリュームが空である

- BMR リストアジョブ中に致命的エラーが報告されません

原因

BMR リストアワークフローは、物理ボリュームが RAW ディスク上に直接作成される、シンプロビジョニングされた LVM 構成を完全にはサポートしません。

BMR リストアロジックでは、シンプロビジョニングがパーティションベースの PV によってバックアップされることを想定しています。RAW ディスクに PV を作成する場合、BMR は次のような動作になります。

- ボリュームグループとシンプールのメタデータを再作成する
- シン論理ボリュームを再作成またはデータ入力しない
- シン LV に含まれるファイルシステムデータをリストアしない

回避方法

警告: 次の手順では、シン論理ボリュームを削除して再作成します。正しく実行しないと、データが永続的に失われる可能性があります。LVM のレイアウトを理解していて、有効なバックアップがある場合にのみ実行してください。

前提条件

- ボリュームグループが存在する
- シンプールが存在する
- NetBackup バックアップに、シン論理ボリュームのデータが含まれている

リカバリ手順

1. シン論理ボリュームをマウント解除します (マウントされている場合)。

   ```
   umount <MOUNT_POINT> 2>/dev/null
   ```

2. 既存のシン論理ボリュームを削除します。

   ```
   lvremove -y <VG_NAME>/<THIN_LV_NAME>
   ```

3. ボリュームグループ内の論理ボリュームを検証します。

   ```
   lvs <VG_NAME>
   ```

4. シン論理ボリュームを再作成します。

   ```
   lvcreate -V <VIRTUAL_SIZE> -T <VG_NAME>/<THINPOOL_NAME> -n
   <THIN_LV_NAME>
   ```

5 論理ボリュームを再び検証します。

```
lvs <VG_NAME>
```

6 シン論理ボリューム上にファイルシステムを作成します。

```
mkfs.xfs -f /dev/<VG_NAME>/<THIN_LV_NAME>
```

7 ブロックデバイスを検証します。

```
blkid /dev/<VG_NAME>/<THIN_LV_NAME>
```

8 マウントポイントを作成し、ボリュームをマウントします。

```
mkdir -p <MOUNT_POINT>
```

```
mount /dev/<VG_NAME>/<THIN_LV_NAME> <MOUNT_POINT>
```

9 マウントを検証します。

```
df -lh
```

10 必要なデータの <MOUNT_POINT> へのリダイレクトリストアを実行します。

推奨されるベストプラクティス (強く推奨)

今後の BMR リストアでこの問題を防ぐには、次のようにします。

- データディスクにパーティションを常に作成する
- パーティションデバイスに LVM 物理ボリューム (/dev/sdb1 など) を作成する
- RAW ディスクに PV を直接作成することを避ける

状態

これは、RAW ディスクに作成されたシンプロビジョニング LVM 構成の現在の BMR リストアワークフローにおける既知の制限事項です。

文書化された回避策を使用して、シン論理ボリュームをリカバリし、データをリストアしてください。

NetBackup クラウドオブジェクトストアの作業負荷の操作上の注意事項

この項では、バージョン 11.2.0.1 の NetBackup クラウドオブジェクトストアの作業負荷に関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

NetBackup 11.1 より前のバージョンからアップグレードした後の完全バックアップ

Amazon S3 では、一部の API と地域における所有者オブジェクトの表示名パラメータのサポートが廃止されています。この変更は NetBackup によるバックアップの識別方法に影響する場合があります。表示名パラメータが以前のバックアップから欠けている場合、NetBackup はバックアップを増分バックアップではなく新しいバックアップとして扱います。

回避方法:

回避方法はありません。アップグレード後、NetBackup は最初に完全バックアップを実行します。後続のバックアップは、ポリシーで構成されている場合、増分バックアップです。

次の点に注意してください。

- 11.1 より前のバージョンの NetBackup からアップグレードする場合、この動作を考慮します。
- アップグレード後の潜在的な完全バックアップに対応するために、バックアップスケジュールとストレージ容量を確認します。

バックアップホストとしての RHEL メディアサーバーのサポート対象バージョン

NetBackup 11.1.0.2 のクラウドオブジェクトストア作業負荷のバックアップホストとしてサポートされている RHEL メディアサーバーのバージョンは、RHEL 9.5 以前です。

NetBackup バージョン 11.2.0.1 の AIR (自動イメージレプリケーション) では NetBackup 10.2 以降が必要

NetBackup バージョン 11.2.0.1 があるコンピュータから、10.2 より前のバージョンの NetBackup があるターゲットコンピュータに対し、AIR (自動イメージレプリケーション) を実行することはできません。

回避方法:

なし。ターゲットコンピュータを NetBackup バージョン 10.2 以降にアップグレードします。

バックアップジョブが応答しなくなり、一時的なステージング場所で大量の領域を消費する。

NetBackup クラウドオブジェクトストアのデータ保護機能では、`ListObjects S3` API を使用してオブジェクトのリストを反復し、バケット内のオブジェクトをさらに読み取ってバックアップします。`ListObjects S3` API は、キー名と NextContinuationToken に基づい

て、1 つの要求につき最大 1,000 個のオブジェクトを辞書式順序で返します。この NextContinuationToken はページ分割に使用されます。たとえば、1 回の `ListObjects S3` API 呼び出しで、1,000 個のオブジェクトの次のセットを取得し、新しい NextContinuationToken を使用して続くページを取得します。

Hitachi などの特定のクラウドオブジェクトストアプロバイダでは、オブジェクト名に特定の特殊文字が含まれていると NextContinuationToken が正しく動作せず、バックアップパフォーマンスが妨げられる可能性があります。

この動作により、一時的なステージング領域で NetBackup が使用する `cos_sqllite` データベースが中断されます。このデータベースには、進行中のバックアップジョブのオブジェクトリストが格納されます。この中断により、`cos_sqllite` データベースのサイズが大幅に増加し、一時的なステージング領域のディスク領域がいっぱいになります。これにより、NetBackup ジョブに時間がかかり、最終的に失敗します。

回避方法:

1. 各バッチの適切な値を返すために、`ListObjects S3` API 呼び出しで NextContinuationToken を再構成します。
2. 既存のバックアップジョブを取り消し、バックアップを再試行します。

NetBackup NAS の操作上の注意事項

NetBackup Snapshot Manager および NDMP V4 スナップショット拡張機能を使用して、クライアントデータのスナップショットを NAS ホスト上に作成できます。NAS スナップショットは、ある特定の時点のディスクイメージです。ディスク上のスナップショットは、任意の期間保持できます。NetBackup のインスタントリカバリ機能を使用すると、ディスクから効率的にデータをリストアできます。多くの場合、NetBackup では、NAS-Data-Protection ポリシーと NDMP ポリシーを使用して、NAS のスナップショットベースのデータ保護を実行できます。このトピックでは、NetBackup 11.2.0.1 の NetBackup NAS に関連する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

ファイルパスの親ディレクトリが NDMP 増分イメージに存在しないことがある

NetBackup のネットワークデータ管理プロトコル (NDMP) バックアップポリシーをバックアップ選択項目の `set type=tar` 指示句で設定している場合に、問題が起きることがあります。増分 NDMP バックアップが保存するファイルのパスの親ディレクトリはバックアップイメージに存在しない場合があります。この問題について詳しくは、ベリタス社のサポート Web サイトで次の TechNote を参照してください。Cohesity

https://support.cohesity.com/s/article/article-100031122

NetBackup の国際化と日本語化の操作に関する注意事項

このトピックでは、NetBackup 11.2.0.1 の国際化、日本語化、および英語以外のロケールに関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

データベースおよびアプリケーションエージェントでのローカライズ環境のサポート

NetBackup データベースおよびアプリケーションエージェントの次のフィールドでは、ASCII 以外の文字がサポートされています。

- Oracle:
  データファイルパス、表領域名、TNS パス
- DB2:
  データファイルパス、表領域名
- SAP:
  英語版 SAP は、ローカライズされた OS で動作します。(ローカライズされた SAP フィールドは特にありません。)
- Exchange:
  メールボックス、添付ファイルの名前と内容、パブリックフォルダ、連絡先、カレンダー、フォルダ、データベースパス
- SharePoint:
  サイトコレクション名、ライブラリ、サイトコレクション内のリスト
- Lotus Notes:
  電子メールデータ (.nsf ファイル)
- Enterprise Vault (EV) エージェント:
  ボルトストア、パーティション、データ
- VMware:
  ユーザー名、パスワード、VM 表示名、データセンター、フォルダ、データストア、リソースプール、VApp、ネットワーク名、VM ディスクパス

特定の NetBackup ユーザー定義の文字列には非 US ASCII 文字を含めないようにする

NetBackup の次のユーザー定義の文字列には、非 US ASCII 文字を含めないようにする必要があります。

- ホスト名 (プライマリサーバー、メディアサーバー、Enterprise Media Manager (EMM) サーバー、ボリュームデータベースホスト、メディアホスト、クライアント、インスタンスグループ)
- ポリシー名
- ポリシーの KEYWORD (Windows のみ)
- バックアップ、アーカイブ、およびリストアの KEYWORD (Windows のみ)
- ストレージユニット名
- ストレージユニットディスクのパス名 (Windows のみ)
- ロボット名
- デバイス名
- スケジュール名 (Schedule Name)
- メディア ID
- ボリュームグループ名 (Volume group name)
- ボリュームプール名
- メディアの説明 (Media description)
- Vault ポリシー名
- Vault レポート名
- BMR 共有リソースツリー (SRT) 名
- トークン名
- ストレージライフサイクルポリシー (SLP) 名

RHEL 10 の NetBackup BAR GUI で日本語と中国語の文字が正しく表示されない

RHEL 10 システムでは、バックアップ、アーカイブ、リストア (BAR) の NetBackup GUI で日本語と中国語のテキストが文字化けする場合があります。この問題は、必要な CJK フォント パッケージが RHEL 10 にデフォルトでインストールされていないために発生します。

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. 必要な CJK フォントパッケージをインストールします。

```
sudo dnf install google-noto-sans-cjk-fonts
```

2. フォントキャッシュを更新します。

```
fc-cache -fv
```

3. フォントのインストールを検証します。

```
LANG=ja_JP.UTF-8 fc-match
```

Helios との NetBackup の統合 - 操作上の注意事項

メモ: 適用対象: Helios を介してアクセスする場合、NetBackup 11.2 以降

表 3-4 既知の制限事項とサポートされない操作

分野	制限事項	回避方法
レポート	Helios でテープの内容のレポートを利用できない	NetBackup Web UI を使用する
認証	SSO とスマートカードのユーザーがサポートされない	NetBackup Web UI 経由でログインする
ログの収集	収集したログのダウンロードが無効になる	NetBackup Web UI を使用する
リストア	ファイル/フォルダのダウンロードが無効になる	NetBackup Web UI を使用する
ファイル操作	大容量ファイルのダウンロードがサポートされない	NetBackup Web UI を使用する
ジョブの監視	更新がほぼリアルタイムであり、リアルタイムではない	NetBackup Web UI を使用する
セッション管理	ユーザーセッションを終了できない	NetBackup Web UI を使用する
API アクセス	Swagger ドキュメントを利用できない	NetBackup Web UI を使用する
MFA	MFA を構成できない	サポートされない
API キー	API キーを追加できない	サポートされない
RBAC	Helios ユーザーを NetBackup RBAC に追加できない	サポートされない
更新	ローカルコンピュータからの EEB/パッチのアップロードが Helios で無効になる	NetBackup Web UI を使用する
クラウドの操作	スナップショットサーバー拡張機能の追加とクラウドエージェント操作の実行が Helios で無効になる	NetBackup Web UI を使用する

Sheltered Harbor 接続エラー

Sheltered Harbor プロジェクトは終了しました。そのため、NetBackup Sheltered Harbor ソリューションは、Sheltered Harbor 監視ログサービスに接続できません。

MongoDB Ops Manager の増分バックアップが特定のロード条件で不完全になる場合がある

特定のタイミングと作業負荷の条件下では、MongoDB Ops Manager の増分 (INCR) バックアップに変更されたデータの一部が含まれていない場合があります。この問題は、スナップショットの作成直後に新しいデータが作成され、負荷が大きいマルチノードレプリカセット環境で発生する可能性が高い場合に発生します。バックアップジョブは正常に完了することがありますが、影響を受ける増分バックアップチェーンを使用したリストアは、データの欠落または不整合を生じる可能性があります。

この制限事項は、NetBackup 11.2 以降で導入された MongoDB Ops Manager 増分 (INCR) バックアップにのみ適用されます。完全 (完全) バックアップとトランザクションログ (TLOG) バックアップは影響を受けません。現在、バックアップ実行中にこの状態を検出するメカニズムはありません。この問題は、リカバリ検証中にのみ明らかになる場合があります。

回避方法

- データやスキーマの急激な変更が発生した直後は、増分バックアップを実行しないでください。
- 増分バックアップを開始する前に、データがレプリカセットメンバー間で安定するのに十分な時間を確保します。
- 可能な場合は、問題が解決するまで増分バックアップのみに依存するのではなく、完全バックアップまたはトランザクションログ (TLOG) バックアップを使用します。

A

NetBackup ユーザーの SORT について

この付録では以下の項目について説明しています。

- Cohesity Services and Operations Readiness Tools について

Cohesity Services and Operations Readiness Tools について

Cohesity Services and Operations Readiness Tools (SORT) は、ベリタスエンタープライズ製品をサポートするスタンドアロンと Web ベースの強力なツールセットです。NetBackup では、SORT によって、複数の UNIX/Linux または Windows 環境にまたがってホストの設定を収集、分析、報告する機能が提供されます。このデータは、システムで NetBackup の最初のインストールまたはアップグレードを行う準備ができているかどうかを評価するのに役立ちます。

次の Web ページから SORT にアクセスします。

https://sort.veritas.com/cohesity/netbackup

SORT ページに移動すると、次のようにより多くの情報を利用可能です。

- インストールとアップグレードのチェックリスト
  このツールを使うと、システムで NetBackup のインストールまたはアップグレードを行う準備ができているかどうかを確認するためのチェックリストを作成できます。このレポートには、指定した情報に固有のソフトウェアとハードウェアの互換性の情報がすべて含まれています。さらに、製品のインストールまたはアップグレードに関する手順とその他の参照先へのリンクも含まれています。
- Hotfix と EEB Release Auditor
  このツールを使うと、インストールする予定のリリースに必要な Hotfix が含まれているかどうかを調べることができます。

- カスタムレポート
  このツールを使うと、システムに関する推奨事項を取得できます。
- NetBackup のプラットフォームと機能の今後の予定
  このツールを使うと、新しい機能や改善された機能に置き換えられることが予想される項目を確認できます。さらに、置き換わることなく廃止されることが予想される項目に関する情報も入手できます。これらの項目のいくつかには NetBackup の特定の機能、サードパーティ製品の統合、その他の製品の統合、アプリケーション、データベースおよび OS のプラットフォームが含まれます。

SORT ツールのヘルプが利用可能です。SORT ホームページの右上隅にある[ヘルプ(Help)]をクリックします。次のオプションがあります。

- 実際の本のようにページをめくってヘルプの内容を閲覧する
- 索引でトピックを探す
- 検索オプションを使ってヘルプを検索する

B

NetBackup のインストール要件

この付録では以下の項目について説明しています。

- NetBackup のインストール要件について
- NetBackup に必要なオペレーティングシステムパッチと更新
- NetBackup 11.2.0.1 のバイナリサイズ

NetBackup のインストール要件について

今回の NetBackup のリリースには、インストールに必要な最小システム要件と手順への変更が含まれている可能性があります。これらの変更は、Windows と UNIX の両方のプラットフォームの最小システム要件に影響します。『NetBackupリリースノート』のインストール指示に関する多くの情報は、利便性を考慮して提供されています。インストール指示について詳しくは、『NetBackup インストールガイド』および『NetBackup アップグレードガイド』に記載されています。

p.19 の「NetBackup のインストールとアップグレードの操作上の注意事項」を参照してください。

- NetBackup サーバーソフトウェアをアップグレードする前に、NetBackup カタログをバックアップして、カタログバックアップが正常に終了したことを確認する必要があります。
- NetBackup 11.2.0.1 にアップグレードする前に、NetBackup リレーショナルデータベースの 2 倍のサイズの空きディスク領域があることを確認します。 つまり、プライマリサーバーのデフォルトインストールに対して、`/usr/openv/db/data` (UNIX) または `<install_path>¥Veritas¥NetBackupDB¥data` (Windows) のディレクトリを含むファイルシステムにそれだけの空き領域が必要です。これらのいずれかのディレクトリの一部のファイルの場所を変更する場合は、その場所にファイルのサイズ以上の空

き領域が必要です。代替の場所への NBDB データベースファイルの格納について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

メモ: この空きディスク領域の要件は、アップグレードを始める前に、カタログバックアップを正常に終了するためのベストプラクティスを実行していることを前提としています。

- プライマリサーバーとメディアサーバーでは、NetBackup を正常に実行するために、プロセス単位のファイル記述子の最小ソフト制限を 8000 にする必要があります。ファイル記述子の数が不十分な場合の影響の詳細については、Cohesity のサポート Web サイトの次の記事を参照してください。
  https://support.cohesity.com/s/article/article-100006242
- NetBackup のプライマリサーバーとメディアサーバーは、起動時および 24 時間ごとにサーバーのバージョン情報を交換します。この交換は自動的に行われます。アップグレード後の起動時に、アップグレードされたメディアサーバーは vmd サービスを使って自身のバージョン情報をサーバーリストに示されているすべてのサーバーにプッシュします。
- Cohesity は、メディアサーバーのアップグレードの実行中は、プライマリサーバーのサービスを起動して利用可能な状態にしておくことをお勧めします。
- すべての圧縮ファイルは、UNIX/Linux システムで gzip を使用して圧縮されています。NetBackup をインストールする場合、事前に gunzip と gzip をホストにインストールする必要があります。これらのユーティリティは Windows ホストでは必要ありません。HP-UX を除くすべての UNIX プラットフォームでは、バイナリは /bin または /usr/bin に存在し、このディレクトリが root ユーザーの PATH 変数に含まれていると想定されています。HP-UX システムでは、gzip コマンドおよび gunzip コマンドは /usr/contrib/bin に存在すると想定されています。インストールスクリプトを実行すると、PATH 変数にこのディレクトリが追加されます。UNIX でインストールを正常に実行するには、これらのコマンドが存在する必要があります。

NetBackup に必要なオペレーティングシステムパッチと更新

NetBackup のサーバーおよびクライアントのインストールは、NetBackup のすべてのバージョンの互換性リストに一覧表示されているオペレーティングシステム (OS) の定義済みセットでのみサポートされます。ほとんどの OS ベンダーが、製品のパッチ、更新、およびサービスパック (SP) を提供しています。プラットフォームのテスト時には OS の最新の SP または更新レベルでテストすることが、NetBackup のクオリティエンジニアリングのベストプラクティスです。したがって、NetBackup はすべてのベンダー GA 更新 (n.1、n.2 など) または SPS (SP1、SP2 など) でサポートされます。ただし、既知の互換性の問題が特定の SP または更新された OS レベルに存在する場合、この情報は互換性リスト

で特定されます。このような互換性の問題が見られない場合、Cohesity は、サーバーとクライアントに最新の OS 更新をインストールしてから NetBackup をインストールまたはアップグレードすることをお勧めします。

NetBackup 11.2.0.1 およびその他の NetBackup リリースに関する最新の必須 OS パッチ情報は、Cohesity SORT (Services and Operational Readiness Tools) Web サイトおよび NetBackup のすべてのバージョンの互換性リストで確認できます。互換性リストには、最新のメジャーリリースラインでの最小の NetBackup バージョンをサポートするために必要な最小の OS レベルに関する情報が含まれます。場合によっては、NetBackup の新しいリリースが特定のベンダーによる OS 更新またはパッチを必要とすることがあります。

p.50 の「NetBackup の互換性リストと情報について」を参照してください。

p.42 の「Cohesity Services and Operations Readiness Tools について」を参照してください。

NetBackup 11.2.0.1 のバイナリサイズ

次の表には、NetBackup 11.2.0.1 プライマリサーバー、メディアサーバー、およびサポートされているさまざまなオペレーティングシステム対応のクライアントソフトウェアに対する概算バイナリサイズが示されています。これらのバイナリサイズは、初回インストール後に製品が占有するディスク容量を示します。表に一覧表示されているサイズの場合、1 MB は 1,024 KB に相当します。

メモ: 表には、サポートされているオペレーティングシステムのみが表示されています。NetBackup が現在サポートしている最新のオペレーティングシステムのバージョンについては、Services and Operations Readiness Tools (SORT) Web サイトまたは NetBackup のすべてのバージョンの互換性リストを参照してください。

表 B-1 互換性のあるプラットフォームの NetBackup のバイナリサイズ

OS	CPU アーキテクチャ	64 ビットのクライアント	64 ビットのサーバー	注意事項
AIX	64 ビットのクライアント	1490 MB	サポート終了	
Alma Linux		2012 MB		
Amazon Linux		2012 MB		
BC-Linux		2012年 MB		

OS	CPU アーキテクチャ	64 ビットのクライアント	64 ビットのサーバー	注意事項
Canonical Ubuntu	x86-64	2012年 MB		
CentOS	x86-64	2012年 MB	7462 MB	
Debian GNU/Linux	x86-64	2012年 MB		
Kylin Linux Advanced Server 10.0		2012年 MB		
NeoKylin Linux Advanced Server		2012年 MB		
Oracle Linux	x86-64	2012年 MB	7462 MB	
Red Hat Enterprise Linux Server	POWER 8/9 クライアント	501 MB		
Red Hat Enterprise Linux Server	x86-64	2012年 MB	7462 MB	
Red Hat Enterprise Linux Server	z/Architecture	712 MB	サポート終了	メディアサーバーまたはクライアントとの互換性のみ。
Rocky Linux クライアント		2012年 MB		
Solaris	SPARC	1070 MB	サポート終了	
Solaris	x86-64	1030 MB	サポート終了	
SUSE Linux Enterprise Server	POWER 8/9 クライアント	499 MB		
SUSE Linux Enterprise Server	x86-64	1406 MB	6499 MB	

OS	CPU アーキテクチャ	64 ビットのクライアント	64 ビットのサーバー	注意事項
SUSE Linux Enterprise Server	z/Architecture	730 MB	サポート終了	メディアサーバーまたはクライアントとの互換性のみ。
Windows	x86-64	2208 MB	4490 MB	互換性のあるすべての Windows x64 プラットフォームが含まれます。

C

NetBackup の互換性の要件

この付録では以下の項目について説明しています。

- NetBackup のバージョン間の互換性について
- NetBackup の互換性リストと情報について
- NetBackup のライフサイクル終了のお知らせについて

NetBackup のバージョン間の互換性について

プライマリサーバー、メディアサーバー、およびクライアントの間で、バージョンが異なる NetBackup を実行できます。この旧バージョンのサポートによって、NetBackup サーバーを 1 つずつアップグレードして、全体的なシステムパフォーマンスに与える影響を最小限に抑えることができます。

NetBackupではサーバーとクライアントの特定の組み合わせのみがサポートされています。バージョンが混在する環境では、特定のコンピュータが最新のバージョンである必要があります。具体的には、バージョンの順序を NetBackup Snapshot Manager コンピュータ、プライマリサーバー、メディアサーバー、クライアントのようにします。たとえば、11.0 NetBackup Snapshot Manager > 10.2 プライマリサーバー > 10.0 メディアサーバー > 9.1.0.1 クライアントというシナリオがサポートされます。

NetBackup バージョンはすべて 4 桁の長さです。NetBackup 11.0 リリースは 11.0.0.0 リリースです。同様に、NetBackup 10.2 リリースは NetBackup 10.2.0.0 リリースです。サポート目的では、4 番目の数字は無視されます。10.2 プライマリサーバーは 10.2.0.1 メディアサーバーをサポートします。サポートされない例は、10.2.0.1 プライマリサーバーと 11.0 メディアサーバーの組み合わせです。

NetBackup カタログはプライマリサーバー上に存在します。したがって、プライマリサーバーはカタログバックアップのクライアントであると見なされます。NetBackup 構成にメディ

アサーバーが含まれている場合は、プライマリサーバーと同じ NetBackup バージョンを使ってカタログバックアップを実行する必要があります。

NetBackup バージョン間の互換性について詳しくは、Cohesity SORT Web サイトを参照してください。

EOSL 情報をオンラインで確認します。

NetBackup の互換性リストと情報について

『NetBackup リリースノート』のドキュメントには、NetBackup のバージョン間で実施された大量の互換性の変更に関する記述が含まれています。ただし、プラットフォーム、周辺機器、ドライブ、ライブラリの最新の互換性情報は、NetBackup の Cohesity Operations Readiness Tools (SORT) Web サイトにあります。

p.42 の「Cohesity Services and Operations Readiness Tools について」を参照してください。

NetBackup では、SORT によって、インストールとアップグレードのチェックリストのレポートと、既存の複数の環境にわたりホストの設定を収集、分析、報告する機能が提供されます。さらに、ご使用の環境にインストールした Hotfix や EEB がどのリリースに含まれているかを特定できます。このデータを使って、システムで特定のリリースのインストールまたはアップグレードを行う準備ができているか評価します。

NetBackup 互換性リスト

SORT に加えて、Cohesity はお客様がすぐに NetBackup の最新の互換性情報を参照できるようさまざまな互換性リストを提供しています。

NetBackup のすべてのバージョンの互換性リスト

メモ: 相互に互換性がある NetBackup のバージョンについて詳しくは、ソフトウェア互換性リスト (SCL)、SCL 内の[NetBackup のバージョン間の互換性 (Compatibility Between NetBackup Versions)]の順に選択します。

NetBackup のライフサイクル終了のお知らせについて

Cohesity は多種多様なシステム、プラットフォーム、オペレーティングシステム、CPU アーキテクチャ、データベース、アプリケーション、ハードウェアに対し、可能なかぎり優れたデータ保護を提供することに取り組んでおります。Cohesity社は、今後も NetBackup システムのサポートを見直してまいります。これにより、製品の既存のバージョンの保守と、以下についての新しいサポートの導入とを適切なバランスで行っていくことができます。

- General Availability リリース
- 新しいソフトウェアおよびハードウェアの最新バージョン

- 新しい NetBackup の機能

Cohesity が新しい機能とシステムのサポートを絶え間なく追加していく一方で、NetBackup のサポートの中には改善、置換、削除が必要なものもあります。これらのサポート処理は、古い、またはあまり使われない機能に影響することがあります。影響を受ける機能には、ソフトウェア、OS、データベース、アプリケーション、ハードウェア、サードパーティ製品との統合に関するサポートが含まれることがあります。また、場合によっては製造元によるサポートが終了しているか、サポート期間終了間際の製品が含まれる場合もあります。

Cohesity社は NetBackup のさまざまな機能のサポートに変更があった場合でもお客様に支障のないように詳細な通知を提供してサポートいたします。Cohesity社は、NetBackup の次のリリースでサポートされない古い製品機能、システム、サードパーティ製のソフトウェア製品をリスト化していく予定です。Cohesity 可能であれば、ベリタスによって、メジャーリリースの前に最低 6 カ月で可能なかぎり早くこれらのサポートリストを利用できるようにします。

SORT の利用

今後のプラットフォームおよびライフサイクル終了 (EOL) 情報を含む機能サポートの詳細な通知は、Cohesity Services and Operations Readiness Tools (SORT) for NetBackup のホームページにあるウィジェットから入手できます。SORT for NetBackup のホームページにある[NetBackup のプラットフォームと機能の今後の予定 (Future Platform and Feature Plans)]ウィジェットは、次の場所から直接見つけることができます。

https://sort.veritas.com/nbufutureplans

NetBackup のサポート終了 (EOSL) 情報は、次の場所から入手することもできます。

https://sort.veritas.com/eosl

p.42 の「Cohesity Services and Operations Readiness Tools について」を参照してください。

プラットフォーム互換性の変更について

NetBackup 11.2.0.1 リリースには、さまざまなシステムのサポートにおける変更も実装されています。SORT の利用に加え、『NetBackup リリースノート』ドキュメントおよび NetBackup の互換性リストを確認してから、NetBackup ソフトウェアをインストールまたはアップグレードする必要があります。

p.9 の「NetBackup の新しい拡張と変更について」を参照してください。

NetBackup のすべてのバージョンの互換性リスト

D

他のNetBackupマニュアルおよび関連マニュアル

この付録では以下の項目について説明しています。

- NetBackup の関連マニュアルについて

NetBackup の関連マニュアルについて

Cohesityは、NetBackup ソフトウェアに関連するさまざまなガイドと技術マニュアルをリリースしています。特に指定のないかぎり、NetBackup のマニュアルは「NetBackup Documentation Landing Page」から PDF 形式でダウンロードするか、HTML 形式で参照できます。

NetBackup が新たにリリースされるたびにすべてのマニュアルが公開されるわけではありません。マニュアルには、NetBackup 11.2.0.1 用が公開されていない他バージョンのドキュメントの参照が記載されている場合があります。このような場合は、参照可能な最新バージョンのマニュアルをご覧ください。

メモ: Cohesity は、PDF リーダーソフトウェアのインストールおよび使用に関する責任を負いません。

UNIX に関するすべての内容は、特に指定しないかぎり、Linux プラットフォームにも適用されます。
